包は〆システムにより大石雄介が主宰します。

〆システム要領

1. 俳句、散文とも分量に制限なく、締切りも各人の自由とする。
2. 各人は、自稿を読ませたい相手に送稿する。その際、送稿が〆システムによることを明記する。(注参照)
3. 編集・発行権は原稿受取人に属し、集まった原稿から随意に雑誌をつくることができる。その発行、公開等も随意とする。
4. 発行、公開された雑誌の一冊は、出稿者に送本することとする。
5. 発行経費は、発行者の個人負担とする。
6. 〆システムの新しい仲間への趣旨徹底は、各人の責任とする。

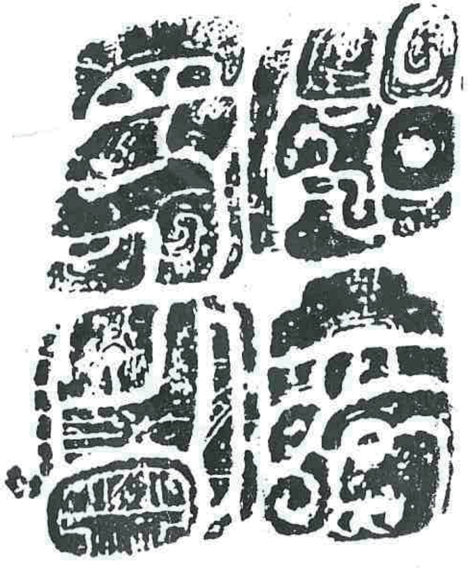
(注) 送稿の際は下記に統一して下さい。
<当送稿は〆システムによります>

包8号目次

大石雄介句録(1) 1 大石雄介

包・ぱお

8号
2001・10・15



大石雄介句録　1（413　1/25｜4/30）

榠樝の黄さころがすと妻の声が来るよ

榠樝の黄は傷みを加え皿真白

榠樝の歪みがすこしずつ右へ寄るよ

皿に榠樝一顆あとは風が吹くよ

こちら榠樝の黄の真下口吸う

弟のようにこちら向く榠樝かな

三日ほど朝日が積もる榠樝かな

1/25

雪がふる道のかどかどぼくらに

雪の夜の川がしきりに鳥を鳴かす

雪がふる抱きあうことは流れること

ふる雪の銭を人間に閉じること

ふる雪がここからはもう體である

雪息（や）んで人間が人間を洗うよ

雨は雨のかたちのままここに積もれ

雪になる畑いのちは切るときこそ

雪畑から雪畑へ鳥の声が転ぶ

雪の河は鷭の番の赤きかな

1/26　1/30

河原鶸が雪鳴きそこね鳴きそこね
雪は雪の白さ君をゆっくり吸う
亘の銀河は犬ひく紐が赤いよ
冬鳩六羽のたわぶれ飛びの果ての一羽
鶸のふりする冬芽やぼくらここにいる
これは鶲の眉間が人を打つ音かな
夏柑の黄を鵯と奪い合うよ
羊蹄の芽を数えている死ぬなよ
蝿取蜘蛛道とぶぼくもくくと鳴くよ
藪椿に気分は蹴られているよ

1/31　2/1

眸子と書き東ティモールと読むなり
いまはここに居る人引く犬と冬鳥
鶸がかぶさるにまかせて人を愛す
青鷺の冬鳥は痩せきった人よ
蘭の花はいちにち何も刺さない
猫が見ていてぼくが見ている冬のこと
乾坤目だけ見える冬畑の人かな
霰して枇杷の花ははげしい
霰を打つ枇杷の花と見えるほどに
霰枇杷の花目にはもう見えない

2/6　2/7

霰雨かつ雷かつ青信号とび交う街路
向かいひもの屋霰半裸交じるよ
この道は鳥だないっしょに傾くよ
草噛んでいるシャム猫が冬の光
道は真中に寄りがち鶏の群
明神岳（みょうじん）の雪は額や顎とび交う
春光ははるかよりする抱きにゆく
青鷺といっしょにいる鳥が冬の道
冬畑や野良猫の大きな青い目
冬の光のホトケノザ何度も咲く

2/11 2/13

紫蘭の芽はまず猫たちが見てゆく
手の甲の痣ひとところ春の人
ごろんと寝ている君が雛のつぎに
君が倒れて歌っていた冬の雲
遊びにゆく鶏と死ににゆく鶏と搏ちあう
鶴を見ない日ふとんの上にいるよ
俺はふとんのようだ好きに走る鶫
すこし刺さっている榛（はんのき）と昼の銀河
白楊（どろのき）の冬芽と冬芽人は痩せて
きくきく歩く冬鳥といるかな

2/15 3/1

藪椿のまえに風の啞のまえに
黄嘴ひとつひとつ川鵜は空気かな
いちめんの実莢十一上の叔母よ

枯草に二つあり黒犬の肛門
川ひかるたび百合鷗の疎林
葉や敵はばらばらにあれ春の畑
春畑と自転車いっしょに開かるべし
淋しくてかる鴨が畑にあがるよ

造反有理の夏みかんが腐る
夏みかん腐ると蛭蓆が写る

鵜とぶ鵜とぶいちばん好きな道
辱められて存す春の畑
もの芽に生きていてあたるかな
枯葭のギヤマンは一節ごと
パンなくてぼくと河原鶸の自転車
體には體のかたち霜の家
春が来るからす周章ててからすき噛む
冬日だろうか瞼だろうか旋回す
昼の銀河と同じ夏みかんが腐る
パン欠いて昼の銀河は犬の声

枯葭のお前にほれぼれとしている
霜の朝は薫の肌打つ薫の肌かな
自由な赤蕪と自由な大根だな
枯葭はゆくもの犬の薫は鏡
乾坤たわぶれている鶴の眉間かな
生きてあれば白楊の芽は日に日に酷
明神岳が日をのせている眠れよ
春の日に春の月入る道の上
君が倒れた大きい椋鳥小さい椋鳥
己が毛を海猫（ごめ）は外にまで放るよ

3/11

レモンガスてふ薫もて朝風呂を焚くよ
猫が好きで枇杷の木は枇杷の花
春の日は枯葭に降る噛むごと降る
落ちている冬の光は転ぶなよ
かまきりの卵嚢（たまご）二つは並んであれ
反射する枯草がきようの道です
反射する枯葭側のかたちかな
人間たることを折って花嗅ぐ人
原始共産主義て小松の皮の赤さ
生むこと噛むことと宙からはじまる鳩

3/25

小さな鴨の夫婦さくらを呑まんとす

ぴいぴいどの水鳥が鳴くか我は

懺悔かくし親しむことしの芽

斜めに斜めに哀しさの雲雀かな

花粉症の人犬の糞か）くも多様

君芽と芽は誰(たれ)にも許さずあれ

耳はまだ口はまだばらばらに夏来る

昼の銀河と蝿取蜘蛛が氷頭の向こう

怒(ぬ)といい怒(ど)といい青葉を愛玩す

拗ねている頬白の頬世界薄暮

4/2

川の高さで日輪と百合鷗かな

一人一人夏みかんの黄に囚われ

声放ちがたくて川鵜が落ちるよ

見えないが雲の明神岳昼の銀河

すこし吃る雲雀と自転車が好きだよ

枯葭を抱いてきて自転車を抱くかな

白楊の芽のいよいよ重しどこから来る

忘れることの快楽(けらく)ホトケノザ群落

菜の花や人は頭をゆらして立つ

春の日の地下変圧器も鳥かな

4/3

中学生跛行す枸杞の芽いたどりの芽

白楊の芽が爆ぜた鳥が軽くなった

ぼくらまるで裸鶏口あけて鳴くよ

林檎の皮と気嫌いい鶏の顔かな

風の鴉がいちばんぼくの春の物

白木蓮ごと明神岳から雨が来る

4/5

鶏が落ちる日がな雑踏を見ている

冬の道に倒れていたら空が来た

ぶらんこの黄色いズボンの子を抱きたい

ひよどりが散らす癌の花ゆきやなぎ

4/6

大きなかばん引く人と春畑を行く人

憎しみまた珠玉枯葭の根の青さは

春の町の凹凸に飽きているかな

鉄塔が細々もやもやとしてきた

ユニセクスの春ざれの上衣かな

指曲げると指鳴る黄蝶川より出づ

遠足は色さわがしわれは虚無に与す

川ではない笹鳴きがぐぐと鳴くよ

白木蓮を花が抜ける家が抜ける

下萌や鴉は白毛さわぎ運ぶ

4/7

川泳ぐ犬あり天辺芽を抱く黄櫨

かる鴨追うかる鴨その藻の花は

4/8

枯葭が身をさらしては傾ぎゆくよ

春の鉄塔赤い大きなもの打つべし

雨の漏る雨具で春の川に出たり

土手いちめんが虎杖の芽の虚無かな

川蝉とぶ少しずれてお寺の朱

4/9

雀いて口奪いあい刺しあい

過ぎてゆく下着は蘭の上に吊るよ

朴の花は風の花動物病院

枇杷を吸う口中に棘刺したまま

虎杖の芽は赭きかな風吹く

四人乗りの自転車梨の花に入るよ

打ちあいつつ春の老人春の自転車

卯木咲いてすぐ入れ替る子供たち

4/10

ひとところ川床の赤い暁闇

花粉症の人責具以て犬引くなり

飛ぶ鳥は鏡のごとし梨の花

かくも痩せて四肢打ちつけて梨の花

睫ながき老犬が虎杖を噛むよ

枯葭たおれ鳥も人も見分けられぬ
性欲が来ている羽虫眼鏡を打つ
梨の花囲うなかれ人跋るなかれ
梨の花車向き変え向き変え来る
せぐろ鷗の薫ひとすじは宙に止まれ
蛇腹管短かし束の間関東タンポポ
家に近き斑は憤怒つぎゲンゲ田
鷄なかき垣通しの花の群落
ニセアカシヤの花かる鴨が家鴨を生む
頭黒き白鷗我ら半身喪失

4/11

鶏飛んで春の日に入る急がねば
梨の花は平泳ぎして犯すよ
あいのこ鴨六ついて七つと数える子
あいのこ鴨三つは似てる落ちたように
丁度いい地縛りの芽に出会えり
封解かれた農具小屋の中がある
春畑行く赤十字車輌が気になる
翼ひろげ雲雀直下ア抱くために
わが體にこのかたちはない虎杖の芽
嘴は自由の皆あいのこ鴨

4/12

ものの芽のここでズボンを脱いだ子

春の公園大きな枠を転がして

4/13

三日ほど虎杖の芽や泪が出る

白楊の向こうにあふれ千の川面

すかんぽのここで必ず犬梳く人

梨の花は行けどぼくは禁欲す

雉の声がときどき季節をとぶよ

習間打ちあう昼の銀河と夏みかん

梨の花が淋しくなるのを見ていた

ゲンゲ田はつうつう雀が落ちるよ

4/14

春の河原が大きな輪を画いておる

春の日は大きくて雪の山かな

ゲンゲ田は風吹くなんでも入ってくる

パラボラアンテナは河原鶸の声満つべし

猟犬の瞼は梨の花さわがし

家間の野をむなしさの雉が走る

人間からタンポポの葉が立つかな

あした咲くタンポポひとつひとつの指

ぺんぺん草てふ何もなき動機かな

顳顬横のキツネノボタン一叢かな

4/15

タンポポの蕾つぎつぎ指の蕾
生れてきてタンポポてふ性器かな
枇杷の実のはじまるところに居るかな
己れさえ通草の花は過ぎてゆくよ
柵の子は格子縞(チェック)が好きで鶸の群
桑の実のぽやぽやがプリズムなすよ
眼鏡の上の春日が遠い山打ちおり
鶺の尾の白毛は遊びよりはやいよ
緑青噴くは何の蛇腹か春の道
午報のごとヒドリ鴨翔つ腹の白さ

4/16 4/17

梨畑の梨は白花地は地を継ぎ
野遊びの幼稚園児は川に出たり
梨の花は逃し葬の華はとどまる
川に乗って黄のゴム風船が走るよ
鮠(やまべ)引く人いまは何を引くらん
雉(おなた)の雛の露わなるは地の快楽(けらく)かな
明神岳は貪するなかれ芽吹くなかれ
目を細め燕が抜ける百舌の穴
鶏返しというべきも来て遊ぶよ
足はやき春の白花はときめくよ

4/18

堰を落とし春の川をおもちゃにした
堰を落としわが畳みかんを奪った
堰を落とし座布団と猫を流した
赤芽槲（あかめがしわ）の赤く暗きに人を託す
枯葭の好きな鳥はぼくも好きだ
電信柱と菜の花の見分けがつかぬ
紫雲英げんげ心なんてもういい
紫雲英げんげ人は體にもどっている
水銀灯（ポール）二つならんで柳絮かな
梨の花の雄蕊三日は保（も）たず行けり

4/19

春の土手を犬の薫もて毀たんとす
犬の毛が柳絮に混じるよろよろよろする
柳絮はげしいがなにもさわらない
柳絮追うと堰のあたりが見えない
柳絮とぶさっき笹鳴きが噎せたよ
水門雌雄あり一つは水を吐く
枝わかれする虎杖を見ていた
鶏や鶏や畑打つ人畑歩く人
堰を落とす今日は柳絮もとばない
堰を落とす川蟬の亘ずれてゆく

4/20

黒き黒き蠅取蜘蛛を日にとばす
梨の花から小さなスパナが落ちたり
春塵や自転車の人ときに白衣
土を噛む雲雀がいるよ喧嘩のあと
枇杷が枇杷だとわかるほどになったよ
人が居てぎしぎしはもう蟻牧の巣
まだ君の雛がいるよ日が強くなる
乾坤からクレーンが吊るす部屋かな
逆光の柳絮は白しぼくが見える
柳絮とぶにまかせ屈身体操をしている

4/21

眼鏡を打つ柳絮の巣までもう少し
黒強き揚羽蝶が柳絮過りけり
柳絮とぶ遠い反射光が二つ
白紙に落ちた羽虫と眼鏡すこし仲間
春昼の薫花多き隣家（となり）である
ゲンゲ田に子を放り子を放りゆくよ
梨の花が終った日の雨の艶
雨の日のたんぽぽの絮鋭いよ
十指あれば指輪して春の電車
広告の人鼻曲りおり春の電車

4/22

春夕焼信号の黄はかく明るき
明神岳の曖昧を愛す春の暮
胡桃若葉のばらばらの空がありぬ
玄関に八朔を積む積んで過ごす
柳絮とび了えたりと思う泪かな
春日打てど逆光のごとき明神岳
犬の糞に青蠅がついてゆくかな
黄あげは行き犬の毛とぶ道かな
水抱くごと人抱くごとく春の鴨
夏椿の蕾は舐めて確かむべし

4/23

川の人と黄菖蒲なかなか近づかぬ
鷭枯葭を引く川中火放けらし
背高き老人春畑と世の境に立つ
春雷の明神岳は何も見えぬ山
定位置につく川の雉捨て自転車
春疾風のかる鴨が存在を覗くよ
木を打つように道で目薬を打つかな
このあたりは耳鳴りの菫というべし
小さくて学校嫌いの蘭の花
春も果ての日月載せて道路鏡

4/24

4/25

大根の花打つ冷雨にみな暴(さら)せよ
花終ってキツネノボタンが始まる
冷雨の雲雀いて山も空も見えぬ
タンポポの花終る我も骨さらさん
見えているから酸葉の穂が揺れるよ
犬小舎に犬なくて枇杷は青き
人失いし家の満天星かくも激し
鳥は雲に函のかたちの自転車かな
春が寒いからではない川にいる
春の雨は牙もつタンポポも牙もつ

何もないむらさきかたばみの行くこと
白塗りのいちぢくの木や風の畑
鉄塔をのぼる人が鶏の高さに
鳥とは違うはやさ葭生えくる
梨の花水門が水噴く猫噴く
風のなよくさふじ畑の自転車
犬の薫は風か鏡か春の雨
枯葭をすべって頬白が消えたり
白藤が終るとふつうの犬の顔
春の鴨と草仲間をしているなり

4/26

腹の毛の汚れた燕がぼくの燕
ぎしぎしはまだだいじょうぶ日日確かむ
梨の実がついた暗渠水噴いている
空(くう)という直に梨の実がついた
梨の実がついたもう長いのがある
花は半ばにあり梨の実がついた
青無花果と人形をぶらさげて抱くよ
酸葉の穂がからからと鳴る日なり
地縛りの花がここを過ぎていった
柳絮とぶ軆にしみる遠い朱

4/27

犬よけの木を焚いている春の畑
ただ春の道に軆を立てること
声がするたんぽぽの絮の玉かな
斑つよき虎杖の道犬の毛とぶ
せめて夏みかんは焼いて捨てらるべし
水を行く接骨木の花は日を打たない
大小の青枇杷に艶やぶれはじむ
ブランコに子供がもどる不思議なきに
梨の実の少年は大きくなるな
梨の実の少年は苦いままあれ

4/28

野菜ははだかのまま蕾かな
梨畑の若葉は海のような迎さ
剣まで枯葭の枯れが来るよ
白花や春の虚空の濁ること
吸殻もとんで春の虚空かな
自転車の上に人立て春の道
春の空の根もとにすこし柳絮かな
鵜と鉄塔がジグザグ行くこと行くこと
雨蛍すなわちはなみずきの花かな
雨の羊蹄雨の重さを額にす

4/29

4/30

菖蒲を浮して濁り川である
菖蒲が葭原に呑まれてゆくよ
菜の花蕊持つかくもさまざまな空間
羽搏きは恍惚のあと春の鴉
捨て自転車の捨て鏡の春日かな
日を食っては春田が厚くなるなり

—— 9号案内 ——

αシステムにより発行は不定

第8号　定価1,000円
2001年10月15日発行
編集・発行／大石雄介
発行所／双弓舎
〒250-0851 小田原市曽比2793 大石雄介方